松尾の滝

君がため　山田の沢に　ゑぐ摘むと　雪消の水に　裳の裾濡れぬ

（巻十　春雑歌　１８３９）

ゑぐはクログワイのことで、池、沼などの水中に群生し、その丸い茎は食べられる。あなたのために、山田の沢でクログアイを摘んでいたら、雪解けの水で裳の裾を濡らしてしまったわ――ということでしょうか。

この万葉歌の紹介板があるのは、松尾寺参詣道の七曲道の入り口のところ、紹介したのは、最近七曲道を整備して歩けるようにした地元のボランティアのグループの人たちです。ただ、山田がここかどうか、それはわからない。

「山田は奈良盆地の中にいくつもあるし、たぶんここではないでしょう」

まあ、そこは承知のうえで、この歌を楽しもうということなのでしょう。

ところで、ずいぶん前に松尾寺の社務所で買った冊子「松尾山の自然」に、この万葉歌のあたりに、「松尾の滝」があったとあります。

『松尾の滝は松尾山の境内への入口で、ここは「立石」とも呼ばれている処。滝はあまり大きくはないが、スギ、アラカシ、リョウブ、ハンノキなどが滝を被い、岸壁にはキンシバイが垂れ下がって黄色の花が咲く。湿地にはミゾソバ、イワガネソウ、シケシダ、イタチシダ、イヌワラビ、ミゾシダ、ヤワラシダなどのシダ植物が繁茂している。松尾の滝より左折して「七曲り」を登ると、県下に誇る老松「勧請の松」に達し、さらに南門に至る。』

「松尾山の自然」は昭和４０年発行で、だからこれは４０年ほど前の風景、その後の大雨時の自然変化で松尾山付近の水流が変わり、滝はなくなってしまったようですが、今でも少し上の第二駐車場の奥は沢になっていて、大雨のあとなど結構水流がある。あるいはそのころは、もっと水流の豊富な大きな沢だったとしたら、そこに滝があっても不思議ではないでしょう。

千年以上前はどうだったか、それはわからないが、確かにこの万葉の歌は、今の松尾山麓のこのあたりの風景によく似合っていますよね。そうなんです、松尾に若葉が萌え出す早春のころ、雪解け水が大きな沢を作り、麓の娘たちが冷たい水に裳裾を濡れるのも構わず、水の中のものを摂る場所だったのです。